1．21世紀の骨関節疾患の疼痛研究の発展・課題・期待

Development, Problem, and Expectation for Pain research of Bone and Joint diseases in 21 century

小林　洋・紺野　愼一

Hiroshi Kobayashi（助教），*Shin-ichi Konno*（教授）／福島県立医科大学整形外科学講座

「骨関節疾患の疼痛」は，超高齢社会における健康寿命のみならず，若年者のQOLにも深くかかわっている重要な問題である．我々医療従事者には，「骨関節疾患の疼痛」に関する医療の科学的根拠を提示するよう求められ続けてきた．

近年，疼痛研究の目覚ましい発展により，その原因が徐々に明らかになってきた．それと同時に，保存的治療と手術的治療の両者も進歩している．これらのツールを使いこなすには，患者を全人的にみるという視点が必要不可欠である．しかし，いまだ未解明の部分は多く「骨関節疾患の疼痛」に苦しむ患者を救うため，我々に課せられた使命は大きい．

key words

慢性疼痛
診療ガイドライン
患者立脚型評価
中脳辺縁系
ドパミンシステム
集学的治療

はじめに

21世紀を迎えてから早16年が経過しようとしている．21世紀は，2000年に国連とWHOが提唱した「運動器の10年」の宣言後まもなく幕を開けた．この間，わが国には超高齢社会が世界に先駆けて到来し，健康寿命の延伸が国家の課題とされてきた．腰痛，肩こり，および慢性関節痛に代表される「骨関節疾患の疼痛」は国民健康基礎調査における有訴率の上位を占めており，要介護状態に代表される加齢によるQOL（quality of life）低下の原因となっている[1]．一方で，慢性疼痛の代表的存在である腰痛は，各年代に同じような頻度で起きており，「骨関節疾患の疼痛」は全年代層を含めた社会全体の課題であることも明らかになってきた．

このような状況の中，我々医療従事者は「骨関節疾患の疼痛」に関する医療の科学的根拠を提示するよう求められてきた．その結果，疼痛研究の分野は大きな発展を遂げている．基礎研究では，慢性疼痛は脳に変化を起こしているということが判明した．疫学では，慢性痛が寿命に関与しているという事実が明らかとなった．これらの事実は，「痛み」を局所の反応として捉えるのではなく，全身状態と関連づけて考えなければならないという新しい視点を提示している．

我々を取り巻く環境は激変の最中にある．疼痛研究の進歩は目覚ましいが，いまだ未解明の部分も多く「骨関節疾患の疼痛」に苦しむ患者を救うため，課せられた使命は大きい．本稿では，これまでの「骨関節疾患の疼痛研究」の発展について振り返るとともに，これからの課題・期待について述べる．

EBMの導入と診療ガイドライン

EBM（evidence based medicine），すなわち，「客観的な事実に基づいた医療」という概念が導入されて久しい．EBMの目的は，臨床判断や治療における個人や施設間のばらつきを是正することである．ガイドラインは，この概念に基づいて，系統的な手法により作成された，推奨を含む文書である．近年，各種運動器疾患に対する診療ガイドラインが作成された．このことによ

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.